

【個人研究】

辞書にみる人間科学 (3) —百科事典編—

堀口 久五郎*

“Human Science” in the dictionary (3): Encyclopedias

Kyugoro HORIGUCHI

The purpose of this study was to indicate how elements of human science are described in encyclopedias based on the results of a search of the National Diet Library Online in Japan.

Results revealed four descriptions of human science item in Japanese print encyclopedias in the National Diet Library Tokyo Pavilion. Each description first appeared from 1958 to 1985, a period known as the encyclopedia boom in Japan.

Descriptions of human science found in recent digital encyclopedias are the same as those in printed encyclopedias. In addition, as a reference, this paper introduced how human science is described in Japanese history encyclopedias and in digital encyclopedias that do not exist in print.

Key words : encyclopedia, description, human science, human sciences, science of man

百科事典、記述、人間科学、人間諸科学、人間の科学

I. はじめに

本論では、百科事典で収録される人間科学の項目の記述を紹介する¹⁾。「事典」の語の使用は1931(昭和6)年『大百科事典』(平凡社刊)に始まるとされるが(今野2014)、現在ではencyclopediaの訳語として「百科事典(百科全書)」が使用されている。特に戦後の高度経済成長期以降の日本では、百科事典ブームとも呼ばれる事態が出来た(総合ジャーナリズム研究所1967, 河野2016)。平凡社から1961(昭和36)年に刊行された『国民百科事典』(全7巻)のリーフレットには、「100万家庭の相談相手!」と記されているが²⁾、1960年代から1980年代頃の日本の家庭では一般に百科事典が現代のインターネットと同様の役割を果たしていたことが知られている。³⁾

百科事典において採録される「人間科学」の項目の記述は4つあり、出版年次順に、平凡社(原喜美1958)、小学館(吉田夏彦1974)、平凡社(荒川幾男1985)、小学館(吉田夏彦1987)と初出が1958年から1985年であり⁴⁾、印刷版百科事典が隆盛状況にあった時期における文章である。その文字数(句読点含む)をみると、原(519字)、吉田(2599字)、荒川(1444字)、吉田(393字)であり、国語辞書の人間科学を記述する字数平均の53.8字⁵⁾と比べて格段に差があるだけでなく、他の専門語辞書(「哲学・思想」, 「社会学」, 「教育学」, 「社会福祉学」, 「看護学」等の事典・辞典類)⁶⁾における人間科学の各項目の字数平均と比較しても、百科事典の平均字数が最多となっている。以下、本稿では、紙幅の制約から、百科事典等における人間科学の記述を紹介することにとどめる。

* ほりぐち きゅうごろう 文教大学人間科学部人間科学科

Ⅱ. 百科事典における 人間科学の記述

以下、百科事典で採録された人間科学の項目における4つの記述(文章)を、刊行年次順に記載する。

平凡社編『世界大百科事典』22巻(1958:332-33),17巻(下中邦彦編1967:426-27) 平凡社
にんげんかがく 人間科学

ひと言にしていえば、人間とその諸問題を取り扱う諸科学が新しく総合された暁には生まれるであろうと期待されている学問の新分野。人類学がその対象を単一の有機体、すなわち人間に集中し、人間に影響を与えるいっさいの現象を理解しようと試みてきたため、これまでしばしば多くの学者によって、人間科学は広義の人類学と同義語に用いられてきた。とくにラルフ・リントンRalph Linton(1893～)は人類学をその中核として、社会学、心理学だけでなくその他多くの隣接諸科学を総合して新しい人間科学を樹立しようと努力してきた。この新しい科学の課題は、複雑、多様な人間の存在およびその行為の現象を動的にとらえ、その規則性を発見して秩序づけ、その普遍化をさらに正確に、その範囲を拡大し、人間の諸問題の解決を見いだすことだとしている。人間科学の基盤は日進月歩に拡大され、その研究は多いが、C.K.M.クラックホーンが精神医学者、心理学者、社会学者、文化人類学者、教育学者、生物学者等によってまとめた研究は、人間科学の発展を前進させたものとして特筆すべきである。このほか人間および人間関係の研究機関として、アメリカの諸大学(シカゴ、イェール、ハーヴァード大学等)においては現実生活への強い関心から多次元的につぎつぎに新しい問題の解決を試みている。(原喜美)

相賀徹夫編『万有百科大事典 4 哲学 宗教』
(1974:448-49) 小学館。
人間科学

人間に関する諸科学の総称として使われる言葉で、フランス流の言葉づかい*sciences de l'homme*、

*sciences humaines*では、心理学、歴史学、社会学、言語学、経済学、人類学、民族学、宗教学などをさすといわれる。アメリカ流の言葉づかいでは、似たような意味で「行動科学*science of behavior*、*behavioral science*」という言葉が使われることがあるが、この言葉も、適用される範囲は、人によって違う。

人間に関する学問をさす言葉としては、このほかに「人間学」というものもある。また、労務管理方式の一つとして提唱されている「人間関係論」も、人間を、とくにインフォーマル(普段の)な対人関係に左右される面からとらえる社会学の上にたてられた技術であるが、人間に関する理論の一つに数えられることがある。

こういった言葉づかいのくわしい規定については、心理学、社会学、産業論などの本についてあたってほしいと考える。ここでは必ずしも、個々の科学や著者の用例にはとらわれず、哲学的な見地から、人間についての科学の可能性を考えてみることにする。

まず人間は身体を持ち、この身体は物体の一種である。そこで物体についての科学、つまり、物理学や化学などの、無機的な物質に関する自然科学によって、人間の身体の働きが理解できる面のあることは当然であるが、そういう面があるということにとどまらず、人間全体が、このようにして理解できると主張するのが、「人間機械論」であるといえよう。この立場からすれば、人間科学は、物理学や化学の一部門にすぎないことになる。昔から、人間の働きの一部をたくみにまねるさまざまな「からくり」が作られてきたので、人間は精巧な機械にすぎないのではないかとする想像は、かなり多くの人によって抱かれていたと思われる。人間以外の動物を機械として理解しうることを説いたデカルトにより、この説には哲学的な支持が与えられ、ラ・メトリは、さらに進んで、人間も機械にほかならないと主張した。その後、従来、生物にしか見いだされないと考えられていた物質が、合成できる例が化学において続出したことや、ニュートン力学がきわめて広範囲の現象を説明し得たことや、進化論が成立したこと、などに刺激されて、この説の信奉者はふえている。ただし、

神経生理学の進歩にもかかわらず、意識を、完全に物質に関する言葉だけでは記述することはまだできていない現在においては、この説は、未証明のテーゼにとどまっていることも認めなくてはならない。

人間科学を生物学の一部門として考えようとする立場もある。生物学の範囲もさまざまに考えられるので、もし物理学、化学に還元可能なものだけが生物学であるとすれば、この立場は人間機械論にほかならない。しかし、生命の概念が機械的なもので究明し得ないことを認め、生物学の独立性を主張する立場をとれば、人間機械論からは一歩踏みだすことになる。たとえば動物行動学のようなものは、人間が機械でありうることを否定はしていないかもしれないが、積極的にそのことを前提しているともいえない。

心理学、社会学、文化人類学、経済学、政治学、法律学、こういった学問は、人間の行動を、その意識との関連でとらえようとする。また、価値観の問題を重視する。そこで、生物学からもはみでた範囲を対象としており、もっとも人間らしい面できり扱う人間科学であるともいえるのである。

ところで、物理学、化学、生物学のような自然科学、また今その名をあげたような、社会科学を、さらに研究対象にする学問、いわゆるメタ科学(科学を対象とする科学)がある。これは、これら個別科学の論理構造を分析し、その理論と実在との関係を論じ、さらに、科学をつくっていく働きをになうものとしての人間、つまり、主観、主体としての人間を、問題にする。こうしてメタ科学は、近世哲学の認識論的な傾向に接近するものであるが、一般に、科学自体をも考察の対象にとりこみ、より広い見地から人間をとらえようとする、哲学的人間学というものが考えられる。哲学といっても、プラトン主義、アリストテレス主義、トマス主義、批判哲学、ヘーゲル主義、マルクス主義、生の哲学、歴史主義、現象学、実存分析、分析哲学と実にさまざまな立場のものがあり、どれをとるかにより、人間の内容も当然変わってくる。また、時には、これらの哲学の非科学性が非難の意味を込めて論ぜられることもないではない。しかし、近ごろは、科学と哲学を対立させるよりも、

両者のおぎない合う面に眼をつけ、そのコンビを活用しようとする実際家もふえてきている。たとえば、精神病の治療に、自然科学にもとづいて開発された薬品が使用されるのみならず、現象学的方法が、診断などに利用されていることは、よく知られているところである。

さて、数理科学が盛んになるにつれて、人間の理解のための新しい角度が開けてきた。たとえば人間の感情の動きをあらわすプログラムをいくつか作って、これをコンピューターにかけてみる。その結果と、心理学的な実験や精神病理学における臨床的な所見とを照らしあわせることにより、情緒の働きについて新しい知見を得る。こういったアプローチが用いられるようになってきた。

これは、一見、既成の科学(今の例でいえば心理学、精神病理学)の内部での、一つの新しい技術の採用にすぎないことのように見えるかも知れないが、人間を、必ずしもそのハードウェアにこだわらずに、とらえようとする方向を積極的に打ち出している点で、画期的ないき方である。かえりみれば、社会科学や哲学も、ソフトウェアの方向から人間をとらえようとしていたものともいえる。しかし、従来は、この面の意義が十分に評価されず、むしろ理論形成の上で自然科学とは違う論理が使われるといったことの方が強調されてきた。数理科学は、人間をとらえる時の論理が、自然科学のものとは本質的に異なる必要はないことを実証した点でも、貢献している。従来、哲学的な認識論が研究してきた、人間の情報処理の働きについても、最近では、情報科学とよばれる数理科学が、これを扱うようになってきている。

そうして、数理科学の有効性をシンボリックにあらわしているものは、コンピューターであるが、数理科学は、必ずしもコンピューターにのりやすい問題のみをとり扱っているのではなく、もっと射程の広いものである。要するに、研究対象を、論理的な構造としてとらえようとするものであり、このようにとらえられるかぎりのものは広義の機械といってもよいであろう。この意味で、数理科学による人間の研究は、人間機械論を新しい意味で復活させるものであり、人間科学とよばれてきた諸学を論理的に統一することをめざすもの

であるともいえるのである。たとえば人間関係論も、この見地から新しい編成を得るかも知れない。「行動科学」という言葉は、時に、この新しいニュアンスをこめた意味での人間科学をさすのに使われているようである。さて、非論理的な存在として人間をとらえる学が別に成立しうるのはないか。この疑問に対しては肯定的に答える人と、否定的に答える人とがある。(吉田夏彦)

下中邦彦編『大百科事典』(1985: 550) 平凡社
下中直人編『世界大百科事典 21』初版(1988: 550) 改訂新版(2007: 552) 平凡社。

にんげんかがく 人間科学 sciences de l'homme/
sciences humaines {フランス}

人間にかかわる諸事象を探求する諸科学の総称。人文科学とほぼ同義で用いられることもあるが、とくに1960年代以降、言語学、人類学、精神医学、精神分析、心理学、社会学をはじめ、脳神経生理学や動物行動学などを含む人間の諸活動の科学的探求が、旧来の人間理解を根底的に揺るがすほどに発達したのにもない、人文科学に代わってこの語が用いられるようになった。

人間的諸事象の探求は、もちろん古くから行われたが、西欧近世になって自然科学が発展するとともに、とくに18世紀のイギリスやフランスで、自然科学の方法を人間的諸事象にも適用して探求するようことが試みられるようになった。たとえばD. ヒュームは、旧来の道徳哲学moral philosophyに代わって、モラルの領域(社会を含む人間の諸活動)に自然科学の方法を適用する〈人間の学science of man〉を主張し、あるいはサン・シモンは、生理学と心理学を基礎に人間精神の進歩の歴史(社会理論)を探求する〈人間科学〉を構想した。このころにはすでに、ルネサンス以来の〈人文学humanities〉の継承発展のなかで、文献学(言語学)や心理学や民族誌的な研究も発展するとともに、市民社会の〈解剖学〉としての経済学もその探求領域を確立していたが、生物学、生理学、解剖学、医学などの発展とあいまって、〈人間〉を対象とする諸科学の総合としての人間科学の確立への関心がいっそう高まった。

19世紀は、その意味で、人間に関する科学の

世紀ともなったが、しかし〈人間〉を理性をもつ何らかの超越的な精神的存在と考える人間観がなお持続したから、科学の探求対象である人間が、同時に探求する主体でもあるという矛盾、換言すれば、人間科学が発展すればするほど精神的存在としての人間が見失われるという矛盾が積みまとった。とくに人間を精神的存在としてとらえる哲学的伝統の強かったドイツでは、経験科学の伝統の強いイギリスやフランスに対して、この矛盾に敏感であった。イギリスでは、たとえばJ.S. ミルはモラル・サイエンシズという言葉で歴史学、文献学(言語学)、経済学、社会学、人類学、心理学、法学、宗教学などを含む〈人間本性に関する諸科学sciences of human nature〉を意味したが、この語はドイツ語に訳されて〈精神科学Geisteswissenschaft〉となり、やがてデイルタイが客観化された精神としての〈文化〉を理解する解釈学的探求の学をこの名で呼んだ。また新カント学派のウィンデルバントやリッケルトは、〈歴史科学Geschichtswissenschaft〉〈文化科学Kulturwissenschaft〉という語で、人文諸科学を自然科学とは本質的に異なる科学として分別しようとした。ドイツ哲学の影響の強かった日本においては、〈人文科学〉という用語は、ドイツ的な〈精神科学〉〈文化科学〉に近い内容を意味している。そこからまた、〈社会科学〉を、より経験的な科学として、人文科学と区別することにもなった。

しかし、20世紀に入って、人間についての経験科学がますます多様に発展すると、旧来の〈人間〉の観念がしだいに解体された。第1次世界大戦後のドイツで、〈哲学的人間学〉が、見失われた人文諸科学の基礎としての〈人間〉を求めたが、まだ近代的人間観を脱しえなかった。さらに第2次大戦後の1960年代に、とくにフランスで再び人文諸科学を総合する視座が探求されはじめたが、そこでは近代的な〈人間〉を自覚的に排去して、動物と人間、自然と文化の間に横たわる未明の領域の新しい探求が試みられている。レビ・ストロースやフーコーらの構造主義的探求がその端緒であり、これらの試みとともに、〈人文科学〉という語に代わって、社会科学をも含む広義の〈人間科学〉という語が用いられることになった。(荒川幾男)

相賀徹夫編集著作出版者『日本大百科全書』18
(1987:182) 小学館

渡邊静夫編集著作出版者『日本大百科全書』18
第二版 (1994:182) 小学館

人間科学

もともとフランス語の *science de l'homme* の訳語であったといわれるが、いまではヨーロッパ語での語源にこだわらない、日本語の単語として流通している。そうしてその意味も、使う人、場合によってさまざまである。たとえば大学で、伝統的な文学部とは少し肌合いの違う人文系の学部をつくる時に、これに「人間科学部」の名前を与えている場合がある。こういう学部には、哲学者も「哲学的人間学」の担当者ということで参加していることがある。これに対し、生物学、生態学のなかの人間に関する部分と、ロボット工学、人間工学とを組み合わせたようなものを中心として人間科学のイメージを描いている人もいる。また、精神分析学や文化人類学、民族学、言語学などを核としたうえで、文学にもかなり接近したものを「人間科学」とよぶ言い方がジャーナリズムではやったこともある。ギリシア語までさかのぼれば、人類学と同じ語源のことばということになろう。(吉田夏彦)

Ⅲ. 『世界歴史大事典』にみる 人間科学

次に、「百科事典」でなく「専門語事典」の「その他」に区分(堀口2019, 2020)した『世界歴史大事典』(全22巻, 教育出版センター刊)の麻生誠(1985)による人間科学の項目の記述を紹介する。先の吉田(1974)の『万有百科大事典 4 哲学宗教』の記述は「百科事典」の区分に分類したが、「哲学・思想」等の区分にも関連しており、そのことは以下の麻生の『世界歴史大事典』の記述においても同様である。

大阪大学人間科学部に所属していた麻生は、ここでの『世界歴史大事典』に続き、翌年の『新教育社会学辞典』(1986, ぎょうせい刊)、『現代学校教育大事典』(1993, ぎょうせい刊)、『新版現代学校教育大事典』(2002, ぎょうせい刊)の3種の専門語辞書を含む4つの「人間科学」の項目を執筆・

担当している。この『世界歴史大事典』の人間科学の項目は、今回の対象である辞書の中で最多の字数(4213字, 句読点含む)であり、日本の辞書における人間科学の説明として最も長い文章である。

梅棹忠夫・江上波夫監『世界歴史大事典』15(1985:93-94) 教育出版センター

にんげんかがく 人間科学 Science of Man

【系譜】

人間行為や人間関係をさまざまな専門科学の協力によって総合的・実証的に研究しようとする立場の学問を人間科学という。それは理念において一つの総合的学問であるが、現実には、この立場に立つ複数の科学をさすものである。

“人間とは何か”という命題は、人間の歴史とともに古くまたそれはつねに新しい人間探究の問題をはらんでいた。最初は、宗教や哲学の立場から扱われた。その代表として、2000年前のプラトン(前427～前347)やアリストテレス(前384～前322)をあげることができ、現在の人間科学の源流である。

他方、“人間とは何か”の命題は、古くから医療のなかで取り上げられてきた。人間が生命ある存在である以上、病にかかり病み苦しむ悩む。これらを“癒やす技術”としての医療は、メソポタミア・エジプト・インドや中国における古代文明の形成とともに形づくられ発達してきたのである。その歴史はきわめて長い。医療に、実証的な立場をもちこんだのは、ヒポクラテス(前460～前375)であり、そこから自然科学としての医学が芽ばえたとされている。だが医療が自然科学へと発達するのは16世紀に入ってからである。すなわちヴェサリウス(1514～1569)の人体構造論とハーヴィ(1578～1657)の血液循環論の登場である。また同じころ、デカルト(1596～1650)が人間を機械論的にみる立場を体系づけ、人間の人文的探究を大きく推しすすめる端緒を開いたことも注目される。

その後、“人間とは何か”という命題を自然科学のなかでより確かなものとしたのは生物学である。それは人間を哺乳動物の“ヒト”に位置づけ、

“ヒト”を文化をもつ哺乳動物・霊長類として分類したのである。こうして“人間生物学”(Human Biology)が体系づけられるようになった。ここには、ダーウィン(1809～1882)の進化論、遺伝学的发展などに代表される生物学の力強い発展をみることができる。だが、それは、たかだかこの1世紀の間のことである。

また、18世紀以降、人文学と自然科学の谷間において、“人間とは何か”の問いを追求する学問が新たに登場する。それは、人文学から分化した社会科学である。近代市民社会の理論として最も早いのがロック(1632～1704)でありさらにヒューム(1711～1776)以下イギリスとフランスの啓蒙主義がいっせいに活動するのは18世紀。ついで19世紀には、サン＝シモン(1760～1825)とコント(1798～1857)の実証主義が登場する。18世紀を中心として17世紀後半と19世紀の初頭を含む時期が社会科学の確立期であり、その多様な社会理論のなかには、それぞれの人間像が前提とされていたのである。これら社会科学と不即不離の関係で近代の心理学が誕生する。それはヴェント(1832～1920)の実験心理学に始まる。しかし、ヴェント心理学の意識主義・要素主義・構成主義的立場は、多くの批判を受けるところとなり、これら批判のなかから、行動主義心理学・精神分析学・ゲシュタルト心理学が生まれるのである。これらの今日の心理学でありそれは、客観的に観察可能な人間の行動を研究対象とすべきであるという立場をとっている。

こうしてみると、文献学的方法による人文学、人間の病を癒やすことを使命とした医学、生物としての人間を追求する人間生物学、近代市民社会とともに誕生する社会科学と近代の心理学、これら四つの学問の流れが“人間とは何か”という命題をそれぞれ異なった専門的方法論に立って探究してきたことがわかる。だが20世紀に入るとともに総合化の動きがみられるようになる一方個別化も進行している。

【人間科学の成立】

人間科学の誕生はアメリカの人類学者リントン(1893～1953)が編さんした『世界的危機における人間科学“The Science of Man in the World Crisis”』

に求められる。本書は、第二次世界大戦が終わる直前の1944年に出版されここに人間の科学の概念および提唱が初めて示されたのである。その背景には、人類史上最大の人間どうしの殺戮(第二次世界大戦)を前にして人間存在とか人間性が根本的に問われることになった事情がある。そこでは“全体的”な人間の形而上学的把握に代わる科学的把握が強調されていた。その内容をみると、人類学者・心理学者・社会学者の学際的連携がみられ、たとえばガーディナーの基本的パーソナリティー構造という概念が人間探究のための三つの学問の共有財産として提唱されている。

このような人間の科学の方向は、ギリシに引き継がれて、その編さんによる『人間科学の展開“*For a Science of Social man*”』(1954)刊行されるにいたった。そこにギリシをはじめ、人類学者マードック(1897～)およびハロウェル(1892～1974)、社会心理学者ニューカム(1903～)、社会学者パーソンズ(1902～1979)およびベッカー(1899～1960)らが参加し、次のような共通テーマを討議している。自然科学が数学や物理学を基礎として今日めざましい発展をとげているのに比べて、“全体的”な人間を対象とする社会科学や人文科学は、それらを貫く共通の概念やコトバをもつことができないため学問の発達が遅々としている。そこでトータルな人間を対象とする学問の中核科学として社会学・文化人類学・心理学を仮定し、これら三つの科学に共通するテーマや概念や方法を見出しながら人間という“全体的、な人間”の究明に向けて三つの科学が協力していける態勢づくりをめざさねばならない。このことによって、人間行動の科学の拠点をつくり戦争と人間とか技術・組織の発達と人間疎外という形で現れてきている人間の問題状況に取り組んでいこうとしたのである。

当然のことながら人間科学は、社会諸科学の学際的研究の気運を生んだ。その代表として、パーソンズとシルズ(1911～)が共編した『行為の一般理論をめざして“*Toward a General Theory of Action*”』(1951)がある。またパーソンズの『社会体系“*Social System*”』(1951)も同様の方向をめざしている。それは、社会を社会システム・文化シ

システム・パーソナリティー=システムの三つからとらえようとするものであり、のちにはこれらに有機体システムが加わった。この系譜に属する人間科学は、社会科学の人間科学的統合を中心としていたとみることができる。アメリカでは、これらの動向と不即不離の関係で行動科学 (Behaviorial Science) が発展しつつあった。それは、1950年代以降生物科学と社会科学にまたがる人間行動の統一理論への動きが強まり、〈人間の行動について、客観的な方法で収集された経験的資料に基づいて、一般的な法則を確立し、人間行動を科学的に説明し予測すること〉(ベルレンソン)をめざしたものであった。この場合の行動は、観察可能な人間行動が中心であり、より内面的な人間の行為にまで迫るものでなかった。

他方このような自然科学的方法の一元論をとる行動科学と異なり内在的な理解の方法とか了解の方法をも排除しない、より開かれた人間科学がフランスを中心に1930年末急速に発達してきた。いわゆるシアンス=ユメヌ (sciences humaines) である。これは、人間を対象とし経験的方法を重視する諸学を総合する分類概念であり、領域的には人文諸学と一部重複し、自然科学に対しては開かれた態度をとることを特色としている。また自然と対立して人間を特徴づけているものについての科学であることを強調していることも注目される。そしてそこには、経済学・社会学・心理学・人類学・地理学・民族学・言語学・歴史学・教育学・政治学・考古学・文献学などが包含されている。そしてこれらの学間がお互いに学際的研究を行いつつ総合的な人間科学としての研究成果をあげることが期待されているのである。最近では、人間科学の新しい動向がみられるようになった。それは、情報科学と人間生物学を基礎科学として第5世代コンピュータや遺伝子工学などの先端技術を利用した人間科学の出現である。この場合、心理学・社会学・文化人類学などの社会科学やさらに人文学は、補助的な人間科学として、この新しい総合的な人間科学の一部となるのである。新しい人間科学の主導権は、情報工学者・人間生物学者・医学者などに握られる。背景にはハイテクノロジー社会の出現があり、一種の新人間機械論

ともいえよう。先端的なテクノロジーは、人間の精神的機能を肩がわりする力をもつことによって人間に寄り添うテクノロジーとなったのである。

【日本の現状】

人間の総合的な研究と教育を推進する機関として注目されるのは、1972年(昭和47)に大阪大学に設定された人間科学部である。それは、心理学・生物学系7講座、社会学・哲学系7講座、教育学系7講座からなり大学院の博士課程をも併設して研究と教育を進めている。どちらかというと、フランスのシアンス=ユメヌをモデルとしたものである。このほか学部レベルのみの人間科学部をおく私立大学が3校ある。人間科学に関する研究所は存在しない。わが国で大学院をもつ唯一の人間科学部である大阪大学人間科学部の12年の歴史をふりかえってみて、人間科学の発展の見通しをみてみることにする。この学部は、人間の行動・社会・教育についての諸科学の総合的協力研究・脱領域的研究(インターディシプリナリー=スタディー)によって、現代という一方では学的領域の統合への努力と細分化の進む未曾有の転換期の学問的・社会的要請にこたえる目的で生まれた。学部の教育は人間科学科一本に統合し、そのなかに行動系・社会系・形成系の3専攻を置き学生にそのうちの一つを選択させて教育を行う仕組みとなっている。このような人間科学の教育を受けた学生は、卒業後、官庁・官公庁・教員・製造業・銀行などの第3次産業企業の三つの進路に、ほぼ3分されて就職する。産業社会の情報化・ソフト化の進展は、人間科学部卒業生の需要を高めている。彼らに対する期待は、人間に関する幅広い理解力と人間行動を把握するスキルを兼ね備えていることである。他方、人間科学の研究は、大学院において行動学・社会学・教育学・人間学の4専攻で行われている。だが人間や社会の総合的把握のための個々の学問の成果を総合するという人間科学の理念を達成するにはまだ道遠しの感がある。(麻生誠)

注

1) 本稿では、印刷メディアにおける人間科学の文章を対象としている。電子辞書における人間科学の項目の記述すべてが印刷辞書の記述と同じであり、電子辞書の記述の多くが印刷辞書から採録されていることから、電子版の百科事典の記述はとりあげていない(堀口2019, 2020)。ただし、ここでは、印刷書籍を伴わない電子辞書の中で唯一「人間科学」を立項しているWikipediaの記述を参考までに掲載する(Wikipediaについては、山田2017を参照)。

フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』
日本語版<https://ja.wikipedia.org/> (2020年8月22日検索)

人間科学 (にんげんかがく、英: Human science) とは、人間とそれに関連する諸問題を社会における人間の行動分析を通して解決しようとする多面的な総合科学である [1]。

研究対象 [編集]

元来の科学の分類である自然科学は人間以外の物質・生物などの科学、社会科学は人間社会の科学、人文科学は人間の文化の科学であり、人間そのものを対象とする科学がなかった。

現代社会では人々は何らかの形で科学技術の影響を受けておりそれに起因する問題も多い [1]。特に生産活動に従事する人々は急速な技術革新と直接的に接触する環境にあることから極めて多様で多面的な問題に直面することとなった [1]。そこで科学技術と人間との相関について、人間性の尊重や人間能力の新たな開発という見地から、従来の労働医学や労働衛生学、精神衛生学などの分野を超えた総合的な立場から研究が行われるようになった [1]。

20世紀初頭からそうした方面への関心が、ヨーロッパを中心に芽生え、さまざまな試みがなされてきたが、学部として組織されるようになってきた。日本でも平成になり、各大学に新規に学部、学科が作られ研究されている。([1] 科学技術庁『昭和39年度科学技術白書』79-81頁)

- 2) 百科事典ブームを牽引した平凡社から刊行された『国民百科事典』は1960年代に最も普及していた百科事典の一つであり、それが完結した1962年から約5年間に100万セットの売り上げ部数を数えた。さらに数社の百科事典の競刊状況がみられるなど、従来は研究・教育関連施設等に限定されていた百科事典の所蔵は、1960年代に中高生のいる家庭をはじめ(総合ジャーナリズム研究所1967 b) 一般家庭に急速に普及した(総合ジャーナリズム研究所1967)。
- 3) 現在(2020年8月時)、印刷版の百科事典として刊行されているのは、平凡社刊『世界大百科事典』(2007年改訂新版)のみである。
- 4) 本研究では、辞書数ではなく、あくまで人間科学の記述(文章)を対象としており(堀口2019)、本論の年次は、その文章が辞書で初めて掲載された年を示す。
- 5) 堀口(2020) p. 64.
- 6) 堀口(2020)の「表1」を参照のこと。

文献

(※本文及び注で明記していないものを掲載)

- S.Yamada (2017) The Conceptual Correspondence between the Encyclopaedia and Wikipedia 『日本図書館情報学会誌』vol.63, No.4, Dec.
- 河野誠哉 (2016) 「出版史の中の学習文化」山梨学院生涯学習センター『山梨学院生涯学習センター紀要』第20号 p.77.
- 今野真二 (2014) 『辞書をよむ』平凡社 p.22.
- 総合ジャーナリズム研究所編(1967 a) 「百科事典ブームの実態」『総合ジャーナリズム研究』No.38 東京社 pp.53-60.
- 総合ジャーナリズム研究所編(1967 b) 「百科事典死活の岐路に立つ販売戦」『総合ジャーナリズム研究』No.39 東京社 pp.73-82.
- 堀口久五郎 (2019) 「辞書にみる人間科学(1) 一序論—」文教大学人間科学部『人間科学紀要』第40号 pp.89-97.
- 堀口久五郎 (2020) 「辞書にみる人間科学(2) 一国語辞書編—」文教大学人間科学部『人間科学紀要』第41号 pp.61-70.

[抄録]

本稿の目的は、国立国会図書館オンラインの検索結果に基づき、百科事典における人間科学の項目の記述を紹介することである。国会図書館東京本館が所蔵する印刷版百科事典において記述される人間科学の文章は4つであった。その文章の初出は1958年から1985年までであり、百科事典ブームと呼ばれた時期のものである。近年の電子版百科事典にみられる人間科学の記述は、印刷版百科事典の記述と同一であるが、本論では、参考資料として、歴史大事典の記述とともに、印刷版を伴わない電子版百科事典における人間科学の記述をあわせて紹介した。
